



My Life Work ～仕事と山旅の思い出話～

鹿児島県レクリエーション協会会長／(株)グローバル取締役 | 古木 圭介

はじめは…

昭和 31 年 4 月、私は中学に入学した。

戦後間もないので皆貧しかった。

私の入学した学校はカトリック修道会が経営する学校だったので、学校にはカナダ系の修道士（ブラザー）が沢山いた。

私は小学校時代から冒険や探検好きな子供だった。

中学に入学したら、山岳部というのが目に付いたのですぐ入部を希望した。

最初の登山は夏休みに高校生たちと「えびの高原」に 2 泊 3 日のキャンプだった。

指導は岩井正二先生と言う海軍兵学校出の格好いい先生だった。

当時は装備もなく夏の制服とズック姿で、古びたリュックサックに着替えなどを入れて出かけた。

それでも初めての野外活動に胸躍り、韓国岳や周辺の池巡りなどを大いに楽しんだ。

これが病みつきになり高校生になって本格的な山道具を揃え、岩井先生の指導で高隅山、屋久島の縦走、霧島連山と休みになると出かけた。

忘れられないのが、遭難未遂事件である。

昭和 34 年、私の山の親友である和田紘一郎と二人で冬の屋久島登山を計画した。

屋久島は九州の最高峰・宮之浦岳をはじめ 2,000 m に近い山々があり、冬から春にかけて沢山の雪が降る高山である。

夏には何回か山岳部の活動として登っていたので多少の自信があった。

計画は 12 月 25 日から 1 週間の予定で、花之江河（1,640 m）の避難小屋をベースキャ

ンプに黒味岳や最高峰の宮之浦岳（1,935 m）を制覇することだった。

屋久島に行くには 100 トン余りの小さな貨客船（第十折田丸）で鹿児島港を夜出て、早朝 5 時ごろ一湊港に着くのだが、ここは接岸する港がなく舢（はしけ）で上陸する。

そこからオンボロバスで安房まで行き、下車したところが登山口である。

安房から小杉谷の集落まではトロッコ道を重いザックを担いで登るしかない。

トロッコは営林署が経営しており木材を運ぶため人は乗せてもらえない。

営林署の職員たちは大きな丸太の上にまたがりトロッコを操作しながら下っていた。

小杉谷の小学校宿直室に泊めてもらい、さらに花之江河を目指して登って行ったが待望の雪はわずかで 10cm ほどであった。

先ずは黒味岳（1,831 m）に登頂。

このころから天候は下り坂で、雪が降ってきた。

待ち望んだ雪なので二人は大喜びしたが、翌日になっても雪は降り止まず、12 月 30 日にはもう小屋が埋まってしまうほどの大雪となった。

これでは目標の宮之浦岳には到底登れない。

それどころか周辺は見渡す限りの雪原に変わり登山道など見えるはずもない。

雪は大晦日にやっと止んだ。身の危険を感じ下山を決定。

小屋の外に出るのが一苦勞である。戸が雪の重みでなかなかあかないのである。

やっとの思いで外に出たが、そこは腰までつかる深い雪の雪原である。

重いザックを背負い、ラッセルが始まる。歩は遅々として進まず、湿って重い雪は高校

生の体力を奪っていく。

道などないので5万分の1の地図と勘に頼って次第に下っていくが、その日、13時間歩いてやっと3km進んだだけであった。

夜になり雪洞を掘って一夜を明かすことにした。

湿った雪のため下半身はびしょ濡れの状態であった。

幸い雪は止んでいた。雪洞の中で石油コンロで雪を溶かしささやかな夕食をとった。暖かい食事では寒さは感じない。

翌日もラッセルを繰り返しながら下山を続け、夕暮れが迫るころやっとトロッコ道に辿りついた。

暗くなって小杉谷に無事到着した。

学校でも大騒ぎになっていたと後日聞いたが、その時、山岳部の部長の岩井先生は緊急職員会議で「和田と古木なら大丈夫だ」と言って下さったと後で聞いたときはとても嬉しかったことを覚えている。

この雪山遭難未遂事件はその後の山登りの貴重な体験として身についていて大学時代、社会人時代にも役立ったと思う。

大学に進学して、部活は当然のように山岳部に入部した。

この4年間の訓練と体験は最も過酷で、最も充実していた。

冬富士での訓練中に他大学の学生二人が滑落し目の前で一人死亡、一人重傷を負った。足が震えたが我々は予定通り訓練を続け、山頂にテントを担ぎ上げ極寒の訓練は毎年続いた。

夏から秋にかけては体力訓練とロッククライミングが主な活動であった。

私の夢は中学3年の時に父が買ってくれた井上靖著の「氷壁」の舞台となった北アルプス前穂高東壁の登攀であったので大学三年の秋、後輩と二人でこの



困難な岩壁を9時間かけて登った時の達成感は鮮明に今でも心に焼き付いている。

学生時代に最も危険で困難な体験は、2月厳冬期の前穂・北尾根を踏破し、前穂高岳の山頂を目指した時である。(写真)

10人余りの山岳部員のうち2人だけが山頂に立つことができる。

幸い私はアタック隊員に選ばれ途中吹雪と強風の中、同期生のYと前穂高岳(3,090m)の山頂に立つことができた。

これはチームワークと信頼関係がなければできないので社会に出てから企業経営でも役立つ貴重な経験となった。

初めての海外旅行

昭和39年(1964年)秋、日本初のオリンピックが開催された。

まだまだ日本は戦後復興の途上にあったが、高度経済成長の始まりでもあった。

その年の4月から日本人の庶民が初めてパスポートを持てるようになった記念すべき年である。

でも外貨の持ち出しは一人500ドルに制限されており、海外に行ける人は限られていた。



私の兄は大学4年のとき、かねてから海外に憧れていたのでバックパッキングの旅に出た。

インドと東南アジアを3ヶ月ほど旅して帰国したが、私は兄の話を食い入るように聴いた。

折しも日本は東京オリンピックをきっかけに国際化へ向けて第一歩を踏みだし若者にとって未来が明るくなっていく背景があった。

1966 年私は大学 4 年生になっていた。

兄からも刺激を受け、私もその年の 10 月に初めての海外に出かけることにした。目的地はネパールでヒマラヤ山中を歩くことであつた。

手持ちの資金から往復の交通費を支払うと手元に 8 万円ほどが残り、それを米ドルに交換した。当時は 1 ドル 360 円であつた。わずかなドルを持って横浜港からフランス郵船のラオス号に乗船した。

船底の 8 人部屋は貧乏学生や外国の若い旅人たちで活気があつた。

香港まで 4 日かかり、初めての海外国がこの地であつた。

さらにマニラを経由してバンコクまで 12 日かかった。

ここで下船してインドのカルカッタへ空路飛ぶ準備をした。

インドのカルカッタ空港に到着したのは真夜中だつた。

カルカッタは危険な街なので公園などで野宿は絶対にしてはならないと船中で知りあつた欧米人たちから聴いていたのでホテルに泊まった。

私にとっては夢のようなホテル生活だつたがお金のことを考えるとこんな贅沢が出来ないので翌日からは救世軍の安宿へ移つた。

ここは 20 人余りが一部屋に寝ており夜中に泥棒にあうこともあるのでパスポートとお金は首から下げて寝ていた。

当時はネパールと日本はまだ国交がなくネパール入国ビザはインドで取得しなければならなかつた。

これが厄介な手続きで時間がかかるのである。まず彼らは働く気がない。

スタンプ一つもらうのに 1 週間もかかった。

やっとビザを取得して空路ネパールの首都カトマンズに飛ぶことができた。

航空機はフレンドシップと呼ばれる小型旅客機でパイロット室は開放されているのでヒマラヤの山々が迫ってくるとワクワクして写真も自由に撮れた。

当時、ネパールは王国で長い間、鎖国をしていたが、外貨を得るため登山隊などの受け入れを許可していた。

私はトレッキングでチベット国境まで歩く旅が目的だったので入域許可を得るため役所に行ったがここもあまり働く気のない職員がごろごろしている。

許可を得るのに何日かかるか分からない。

しかしそこで出会ったのが大学の二人の先輩でカトマンズで働いていて王室関係者とも通じていた。

これが幸いして役所の関係者と話がついて入域許可が簡単におりた。

もう一人出会ったのが日大山岳 OB の宮原さんであつた。

彼はヒマラヤ遠征後、ネパールに留まりネパール語を習得し日本語教えながらネパールで事業を起こす計画の中だつた。

街中で知り合い、彼の下宿に招かれて同じ山を愛するものとして貴重な情報を得ることができた。

私の計画を聞き、彼は大事なアドバイスをくれた。

当時チベットでは中国が侵略を繰り返し、ダライ・ラマはインドに亡命。

多くのチベット人はヒマラヤを越えネパールの山中に難民として逃れてきていた。

その中でも勇壮な反共ゲリラと化したカンバ族は私が歩くカリガンダキ周辺にゲリラとして活動をしているとのことで中国人を殺すこともあると教えてくれた。

「君はどう見ても中国人だ。一人旅は危険なのでチベット人のガイドを雇いなさい。金がないなら旅が終了する時、寝袋とシャツなどをやってガイド料の代わりにするといい」とアドバイスや警告をしてくれた。

初めは一人旅の予定だったが、トレッキングの起点であるポカラ村でガイドを探すことにした。

ポカラまでは空路しかないのでなけなしの資金をはたいてオンボロ飛行機で飛んだ。

空から眺める 8,000m 級のヒマラヤの峰々

は圧巻だった。

ポカラの宿、と言っても粗末な家にベッドが一つあるだけ、ここで誰か2週間くらいガイドをしてくれる人はいないか尋ねたところ、すぐに35歳くらいの男を連れてきた。

名前はジェンバといいチベット族である。

英語は全く通じないが、人が良さそうなので契約成立であった。

ここから二人の珍道中が始まった。

言葉の障害は双方にあるのだが、2日もすればお互いの気持ちは通じて、この辺で休もうか、とか今夜はここで泊まろうとか、身振り手振りでなんの支障も感じないまま順調に旅はすすんでいった。

私の歩く地域はカリガンダキ（黒い河）といい崖沿いにある狭い小道の両側は切り立っている。

その奥は7,000 mから8,000 mの雪と氷河におおわれたヒマラヤ連山である。

毎日、その雪山や氷河を眺めながらの旅は山好きの私にとって至福の時間であった。

1週間くらい歩いたころ、ある村はずれの家に泊まることになった。

覗くと今までに泊まった農家とは様子が異なる。

暗がりの中で目だけが鋭く光る男たちが私を凝視している。

ジェンバが何やらチベット語で説明をしている。内容は分からないが、次第に男たちの目つきが好意的になっていくのを感じ安堵した。

彼らは噂のカンバ族のゲリラだった。ジェンバは通信のないこの地域の伝令も兼ねていたのだろう。

そして床をめくって銃を隠しているのまで見せてくれた。

これが宮原さんが言っていた反共ゲリラなのだと分かった。

旅は次第に寒い地域に入っていった。

左の奥に難攻不落といわれた世界第7位の高峰、ダウラギリ峰（8,167 m）が頭上に迫ってくるようで、更には冷たい風が吹き下ろし

てくる。

11月なので雨も雪もほとんど降らないが、ヒマラヤ特有の強風が午後から吹いてくる。

そして10日目にジョモソンという集落に到着したが、ここから先は入域禁止である。兵隊が守っていて私の目指すチベットとの国境までは行きつくことはできなかった。

でもこの山旅では多くの現地人に助けてもらった。

ある村で風邪をひいた私を囲炉裏の側に絨毯をひいて看病をしてくれたチベット人の老夫婦にはことのほか感謝であった。

おかげで翌日には予定通り歩くこともできた。

3週間余りのジェンバとの旅を終え暖かいポカラに戻ってきて、彼にはガイド料の代わりに寝袋と折り畳み傘、着古したセーターをやり了解してもらった。彼は早速、汚れた寝袋を近くの川に持っていき洗っていたのが忘れられない。

飛行場まで送りに来てくれたジェンバとは戦友のような関係になっていた。

その後、インドを旅して、兄も訪れたダーズリンにも行ってみた。

それから香港、台湾、沖縄経由でまだ鴨池にあった鹿児島空港に帰ってきたのは12月の末になっていた。

ポケットには10ドル札が一枚だけ残っていた。

私は兄弟でその後、旅行会社を経営し現在に至っているが、多くの方々に今までで一番印象に残っている旅は何ですか、と聞かれると、大学時代に旅した貧乏旅行が最も心に残る旅であると、迷わず答えている。

仕事のこと

私は大学を卒業後、鹿児島に戻り兄が起業した海外旅行を専門とする旅行会社で働き始めた。

昭和42年（1967年）のことである。

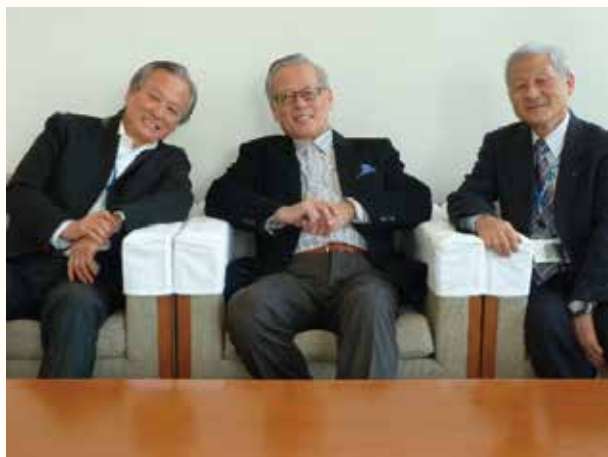
まだ日本人の海外旅行人口は年間 10 万人程度だったが、兄は必ずヨーロッパに多くの日本人が行くようになる時代がくるという経営方針でヨーロッパ研究会と言う任意団体を設立して困難な経営の中、薩摩英国留学生をイギリスに送った薩摩藩にならい頑固にヨーロッパ専門の会社の基礎を築いていった。

昭和 50 年に大マーケットである東京に事務所を構え、その後、大阪にも支店を出した。

日本は高度経済発展をまっしぐらに進んでいたが、これまでの 60 年余りを振り返るとその会社経営は波乱万丈で、かつ充実していた。

古くは 1970 年代の石油ショック、2003 年感染症のサーズ、リーマンショック、近年では阪神淡路大震災、東日本大震災、コロナ感染症などなど難局に直面してきた。

しかしその都度、金融機関やお客様の支えで乗り切ってきた（写真は経営が安定してきた頃の 3 兄弟）。



父・古木俊雄の訓えは人生は「細心にして大胆たれ」と言うものだった。

時代の流れで鹿児島県の事務所は閉鎖したが、今でも多くの鹿児島県のお得意様にお世話になっている。

私はグローバルの役員をしながら、地元の方々の要請を受け、平成元年以降、知覧カントリークラブの造成、サンロイヤルホテルの再建事業、肥薩おれんじ鉄道の改革と運営などに携わってきた。

どれもこれも困難を伴う事業ではあったが、持ち前の好奇心と兄弟の支援、父の訓えとプラス思考で対応してきた。

この間に感謝したいのは良き先輩、同僚、同級生、後輩たちの暖かい支えである。

疲れたら山に行く

60 年間余りの仕事生活で責任ある地位にいた。

新しい事業の立ち上げ、ホテルの再建、第三セクター「肥薩おれんじ鉄道」の運営など。

3, 4 年続けるとストレスが溜まり心身ともに疲れてくる。

そこで 50 代になり私は 2～3 週間の長期休暇を取ることにした。

まずはヒマラヤのトレッキング 3 週間では一切の通信ができない山中を歩く。寒い、空気が希薄、食事がまずい、高山病を併発など多くの困難のなかで大自然が心身を癒やしてくれた。

次はスイスアルプスのトレッキングと登山でブライトホルン（4,164m）登頂とマッターホルンへの挑戦、さらに日本一周の車の旅 35 日間などである。山から帰ると元気になり、仕事の意欲とアイデアが浮かぶ。

今でも毎月一回は近隣の山に登ることを心掛け、年に一回は北アルプスの 3,000 m 峰を目標にしている（写真は 80 歳記念で登った槍ヶ岳）。



もちろん年に 1 回の健康診断は欠かさない。主治医の OK が支えでもある。